



更生 刻々



第4号
令和2年12月17日発行

法務省東京矯正管区更生支援企画課

☎048-600-1560

✉ kouseishien-tokyo@cccs.moj.go.jp

ホームページ

http://www.moj.go.jp/kyousei1/kyousei08_00101.html



受刑者の作業で出た木くず 馬の寝床に

静岡刑務所 地域に支えられ 地域を支える刑務所へ

心遣いのやりとりが苦境を救いました。

コロナ感染症拡大渦中の本年4月20日。静岡刑務所は、静岡市から不織布マスク1,000枚の寄贈を受けました。マスクの確保が最も困難だった時期です。静岡刑務所の苦境を報道で知った静岡市からの温かい心遣いでした。

そして翌5月23日。今度は手を差し伸べる役を担うのです。同所職員が、静岡大学馬術部がコロナ禍で運営危機にあり、このままでは所有する馬を殺処分しかねないというニュースを目にします。「地域に報いるために、自分たちに何かできることはないか。」

職員が馬術部と連絡を取ったところ、苦境の一端を知りました。馬の寝床に必要な木くずの確保に年間72万円ほどかかっており、大きな負担になっていたのです。静岡刑務所では、木作業として、受刑者が家具などを作っていて、その過程でたくさん木くずが出ます。捨ててしまうだけの木くずを有効活用できるのではないかと職員は考えました。

そして心遣いが形となりました。静岡大学と静岡刑務所の間で協定が結ばれ、10月8日には、実際に木くず4㎡が馬術部に提供されました。木くずは馬の寝床として使用後、たい肥としても活用されます。刑務所としても廃棄物削減につながり、良いこと尽くめの連携となりました。地域に支えられ、地域を支える矯正施設へ、今後もまい進していきます。



静岡市からの
マスク寄贈

静岡大学馬術部の
皆さまと記念撮影



再犯防止の取組 ご紹介コーナー

埼玉県とさいたま少年鑑別所の連携

埼玉県では、地域再犯防止推進モデル事業として、犯罪をして起訴猶予・執行猶予等になった高齢者や障害者等のうち、更生緊急保護が適用された人を対象に、住居の確保や就労支援などのサービスにつなげる、いわゆる「入口支援」の取組を実践されています。

モデル事業の中核は、対象者が有する個々のニーズを把握し、適切な支援につなげる「コーディネート」になります。埼玉県は、この取組を地域生活定着支援センターとして実践を積み重ねてきた社会福祉法人に委託し、地方検察庁や保護観察所といった刑事司法機関との連携を進めているところですが、さいたま少年鑑別所においても、この事業に協力させていただいています。

少年鑑別所では、家庭裁判所の行う審判のため、臨床心理学等の専門的知識を有する職員が、非行の原因

の解明と立ち直りのための方策を立てる仕事をしているほか、「法務少年支援センター」という名称で、専門的知識を活用して、地域社会における非行・犯罪防止のお手伝いなどもしています。

埼玉県のモデル事業においては、さいたま少年鑑別所職員が、対象者のアセスメントを目的とした面接や、支援者に対するコンサルテーションを行ったほか、モデル事業の効果検証の一環として、対象者のインタビュー調査への協力もさせていただいています。

地域の非行や犯罪の防止に向けて、専門的な支援を必要とされる際は、ぜひお近くの「法務少年支援センター」にお声掛けください。最寄りの少年鑑別所につながる専用ナビダイヤル（上記）もご利用いただけます。



さいたま法務少年支援センター相談室



法務少年支援センター
0570-085-085

東京少年鑑別所法務技官 こだまさん

「通り過ぎる子ども達に、種を蒔き続ける。「祈り」に似た思いで」

どうして法務技官という仕事を選んだのですか？

更生支援を語る



平成23年、福岡少年鑑別所にて法務技官を拝命。以後複数の少年鑑別所、拘置所を経て、本年度から東京少年鑑別所にて勤務。これまでに500名ほどの少年の資質鑑別等を実施。

高校生の時から、非行少年に興味があったんです。彼らが行動化する背景に何かがあるんだろ、ってずっと気になっていて、大学でも心理学を専攻して。ゼミの先生から法務技官の仕事を紹介されて、「これだ！」って思いました。

非行少年の鑑別は、実際どうですか？

楽しいです。子ども達とのやり取りを通じて、いろんな人生に触れられるし、関係を築くことができる。

子ども達の話聞いて、彼らの人生に向き合って、それを裁判所への通知書という形で表現する。全部がむしろにやっています。

少年鑑別所で彼らが過ごす時間は四週間しかない、その中でできることって限られてるんですよ。少年院や保護観察所など、「次」の処遇につなげるのが私たちの一番の仕事だと思っておりますが、それでも、限られた時間の中で、できることは全部やるぞ、って感じですね。

印象に残っている子はいますか？



少年と面接をするこだまさん

※ 少年役は職員です

少年鑑別所に来る多くの子どもたちにとっては、ただ通り過ぎていくだけの機関かもしれないですけど、私は、私との面接や少年鑑別所での生活が種となって、彼らの「何か」が芽吹けばいいなと思って仕事をしています。「祈り」に似ているかもしれない。それが叶ったとき、本当に「生きて良かった」って思えるんです。天職ですね(笑)。

そのうち一人は、少年院に行っただけですけど、在院中に面接する機会があって、「先生に話聞いてもらって、自分は変わりたいと思えた」って言ってくれたんです。うれしかったですね。二人で泣いちゃいました。

更生小考

③少年犯罪

映画「マトリックス」は仮想世界が現実世界に憑依する物語だった。物語の「支配者」は人類に仮想現実を現実だと思い込ませて管理している。リアリティは脳の回路にしかない。

携帯電話とスマホの登場は生活様式を変えた。平成27年、川崎市の河川敷で中学生が殺害される事件があった。暴行に至る端緒は「LINEの返事が遅い」だった。

SNSの空間は「0か1か」の世界である。この空間の少年たちの「たまり場」は柔軟さや多様性を許さない。しかし、人間は「0か1か」の間のあいまいさの世界で生きている。

かつての「たまり場」的集団の暴走族。構成員は昭和56年に最多の4万629人だった。少年の構成員に限れば、平成30年は3,023人と急減している。また、刑法犯で検挙された少年を罪名別にみると、恐喝と横領は90%台、窃盗も80%台の減少率になっている。逆に勢いを増しているのが、詐欺関係の事件だ。平成30年は、平成元年に比べ56.6%増えている。

SNSも入口となる。求人掲示板を見つけて、「特にすることもないから」と仲介役と接触する。警察庁によると、令和元年に全国で認知した特殊詐欺は1万6851件。この年に摘発された者のうち、少年は619人で2割を超える。うち74.5%が現金やカードを被害者から受け取る「受け子」だった。リアリティから遊離し、犯罪は記号化する。犯罪の質が変わってきている。事件を報じた新聞記事を読ませることで、被害者の痛みに向き合わせる少年院もある。今まで見えていなかった他者が見えてくる。リアリティの重みである。

2020年を振り返る ～更生省考～

この広報紙をお手に取ってくださっている皆様、2020年は、皆様にとってどんな年だったでしょうか。

当課は、新型コロナウイルスの猛威に振り回されつつも、何とか振り飛ばされないようにあがき続けた1年でした。

今年4月、3年目の新体制で船出をした当課は、しかし新型コロナウイルスという猛烈な逆風に吹かれ、地方自治体の皆様への挨拶回りもままならず、予定されていた再犯防止関係の協議会等も中止・延期の嵐で、さてどうしたものか、と頭を悩ませる日々でした。

「それでも、今やれることをやろう」

自治体の皆様への挨拶メールの送信に始まり、当課広報紙(本紙です)の作成・配布、7月の再犯防止推進月間用広報映像の作成(本紙第2号参照)等々、「非接触型」の活動に腐心した年だったと思います。

コロナ禍の中、感染防止対策を取りながら各種協議会、研修等を企画・実施いただいた地方自治体の皆様におかれては、本当にありがとうございました。どうぞ良いお年をお迎えくださいませう。

